

記号としての日本—『極楽台湾』騒動を例に—

横路啓子*

要旨

2002年、日本で出版された旅行情報誌『極楽台湾』は台湾で大きな社会問題を巻き起こした。この雑誌は台湾の風俗情報のみを集めたいわゆるアングラ本で、台湾に輸入され販売されたことによって、主に当時の台北市長馬英九の発言や行動を中心にして2002年初頭の台湾のマスコミを大いに賑わすことになる。これは日本の出版社や書籍を輸入した書店がまったく予想していなかった事態だが、騒動となった原因については「政治的要素、民族主義的要素、性的な要素」という台湾のマスコミが好むモチーフがそろったものであったことが指摘されている。『極楽台湾』騒動は、前年の『台湾論』騒動と比較もされているが、『台湾論』騒動が政治的に仕組まれた騒動であるのとは異なり、『極楽台湾』騒動はなんら政治的な意図もなく、単に台湾に輸入されただけの日本の書籍が、台湾社会全体に大きな反応を引き起こしたという点で、よりありありと台湾社会における日本の意味を示しているように思われる。本論は台湾社会の構造、あるいは台湾と日本の関わりを考える際の一つのヒントとしてこの騒動の顛末を追い、その中で台湾社会において日本がどのような意味を持たされているのかを考察するのが目的である。

キーワード：『極楽台湾』騒動 文化研究 台湾社会 記号 日本

*輔仁大学日本語文学科 講師

作為符號的日本—以《極樂台灣》風波為例

橫路啓子*

摘要

2002 年在日本發行的旅遊雜誌《極樂台灣》，到台灣引進來之後引起軒然大波。這本雜誌雖然只不過是收集台灣的風流場所資訊的三流雜誌，可是在台灣進口銷售之後，以當時的台北市長馬英九的反應為主，讓 2002 年初的台灣各界出現許多憤慨之聲。對日本的出版社或書籍進口商而言，萬萬沒想到日本的雜誌在台灣引起這麼大的風波，而已有學者指出形成風波的原因在於「政治化、民族主義化以及性別化」等台灣媒體最熱衷的因素都包含在其中的緣故。也有人《極樂台灣》風波與前一年發生的《台灣論》風波進行比較，《台灣論》風波是以政治意圖所製造出來的現象，而《極樂台灣》雜誌卻沒有任何政治性的操作，純粹只是以商業目的而進口引起社會問題。由這點來看，筆者相信《極樂台灣》風波更為凸顯台灣社會中，日本所被賦予的意味以及所扮演的角色。作為在思考台灣社會的結構與台日關係時的契機，本論文詳細描述這風波的經過，且由此探討在台灣社會中日本作為符號到底具有何等意義。

關鍵詞：《極樂台灣》風波 文化研究 台灣社會 符號 日本

*輔仁大学日本語文学科 講師

Japan as Symbol: Through the GOKURAKU TAIWAN Commotion

Yokoji Keiko*

Abstract

In 2002, the guidebook GOKURAKU TAIWAN published in Japan was imported to Taiwan, gave Taiwan society a lot talk about. Although it is just patched-together guidebook introduced Taiwan's play spot, but after imported and sold at Taiwan, mainly the over reaction of then Mayor of Taipei Ma Ying-jeou made a big turmoil in Taiwan. To the Japanese publisher or importer, it was quite unexpected to give rise to a big problem. As already pointed, the reason of this commotion made is the topic included political, ethnicity, sexual issues, which the Taiwan media had highly attention constantly. Compared with the TAIWANRON problem occurred in previous years by the political intention, we can find the GOKURAKU TAIWAN problem more clearly showed the characteristic trends of Taiwan society. From this point of view, firstly I describe the whole commotion of GOKURAKU TAIWAN, after that argue about the Japan as symbol in Taiwan, for the hints what think the structure of Taiwan society and the Japan and Taiwan relationship.

Keywords: GOKURAKU TAIWAN commotion, Cultural study,
Taiwan society, Symbol, Japan.

* Lecturer, Department of Japanese Literature and Language, Fu Jen University

記号としての日本—『極楽台湾』騒動を例に—

横路啓子

1.はじめに

小林よしのりの『台湾論』が出版直後の2002年2月、台湾で中国語に翻訳され慰安婦問題を中心に地元で大論争を巻き起こした¹ことは日本でもよく知られているが、その翌年、やはり日本で出版された印刷物が台湾で大きな社会問題を巻き起こしたことはそれほど知られていない。

騒動の発端となった日本の印刷物は『極楽台湾』という旅行情報誌²で、台湾の風俗情報のみを集めたいわゆるアングラ本である。台湾でも「読者層も社会的な価値判断を主導するような中・上階級ではなく、内容もつぎはぎだらけ、一般の家庭や会社では公明正大にテーブルの上に置いておけないような下品な雑誌」³と形容されているが、この本をめぐる一連の騒動は、主に台北市長の発言や行動を中心にして2002年初頭の台湾のマスコミを大いに賑わすことになった。また日本から端を発したこの騒動は、「政治的要素、民族主義的要素、性的な要素」という台湾のマスコミが好むモチーフがそろったものであったことも指摘されている⁴。

『極楽台湾』騒動は、時期も近いことから『台湾論』騒動と同列、あるいは比較した形で取り上げられてもいる⁵。実際にはそれぞれのテキストが持つ意味合いもその騒動の内実も異なるレベルのもので

¹ 『新ゴーマニズム Special 台湾論』が台湾の前衛出版社から『台湾論—新傲骨精神』として中国語版が出版されたのは2001年2月7日で、台湾で論争となったのは、台湾では慰安婦の強制連行はなく、女性は「大出世」だと考えて慰安婦になったとする「慰安婦自願説」の部分である。拙論「翻訳／権力—台湾での『台湾論』騒動をめぐる」(輔仁大学日文系『日本語日本文学』第28号、55-76ページ)を参照されたい。

² 『極楽台湾夜遊び特選街』2001年12月、司書房出版。

³ 陳新民「極楽台湾風波的啓示」サイト『国政評論』
<http://www.npf.org.tw/PUBLICATION/CL/091/CL-C-091-039.htm>

⁴ 宋丁儀(2002)「從『極楽台湾』風波看台湾媒体環境」『新聞評議』(第325号)、新聞評議雜誌社。

⁵ 江冠明(2002)「極楽台湾 極度瘋狂 假道学的批判 傲慢的中国意識」『新台湾新聞週刊』(第304期)31ページ。

はあるが、この二つの騒動が類似したものとして取り上げられるのは、いずれも日本で出版された書籍が台湾で大きな波紋を呼んだという点に集約されるであろう。だが『台湾論』騒動がその作品の創作そのものから台湾側（主に本土派）の意図を反映して作られたものであり、その後翻訳、台湾での出版という一連の政治的な意図で「仕組まれた」ものであるのに比べ⁶、『極楽台湾』騒動はなんら政治的な意図もなく、翻訳という人為的な作業も経ずに単に台湾に輸入されただけの日本の書籍が、台湾の政治的な視点によって捉えられ、台湾社会全体に大きな反応を引き起こしたという点で、よりありありと台湾社会のあり方、台湾社会における日本の意味を示しているように思われる。本稿は台湾社会の構造、あるいは台湾と日本の関わりを考える際の一つのヒントとしてこの騒動の顛末を追い、その中で台湾社会において日本がどのような意味を持たされているのかを考察するのが目的である。なお本稿では、資料として『中国時報』、『聯合報』、『台湾時報』、『台湾日報』、『自由時報』、『中央日報』などの新聞各紙を主な資料とし、その他『新新聞週刊』など雑誌の報道も適宜用いた。各紙の『極楽台湾』関連記事の掲載回数は次の表の通りである。

(表) 『極楽台湾』関連報道（記名ごとに1記事として計算）

新聞名/日付 (2002年)	1.12	1.13	1.14	1.15	1.16	1.17	1.20 ～	合計
中国時報	10	8	4	3				25
聯合報	3	13	1	1	1			18
台湾日報	6	10			1	1		18
自由時報	5	9	1				6	21
中央日報	5	3	3	2				13
台湾時報	5	4					1	10

⁶ 横路啓子(2003)「翻訳／権力——台湾での『台湾論』騒動をめぐって」『日本語日本文学』第28号、55-76ページ。

2. 騒動の顛末

騒動は、2002年1月8日に一般市民から連絡を受けた台北市警察松山支局が、デパート「微風広場」に入っていた紀伊国屋書店に向き『極楽台湾』を没収したことに端を発する。当初は単なる猥褻書籍の取締りに過ぎなかったが、その3日後の1月11日、台北市議会で民進党所属の王世堅議員が『極楽台湾』を取り上げ、当時の台北市長馬英九に対し台北市の風俗対策の甘さを強烈に批判、批判された側の馬英九市長が激怒したことで一気に台湾のマスコミの注目を集めることになる⁷。

王世堅議員は2002年1月11日、台北市議会で『極楽台湾』を取り上げ、この本の中で台北市全体がまるで風俗専門の地域であるかのように紹介されていると指摘、台北市長馬英九の風俗対策が一向に功を奏していないと批判した。この批判に対し馬英九は不快感を露にし、刑法第235条⁸を盾に、この本に掲載されているすべての店を取り締まるよう警察に命じる。そして「日本人観光客は歓迎するが、買春に来た日本人は徹底的に取り締まる」と発表、買春行為をした日本人観光客にはパスポートに「淫虫」というスタンプを押すことも検討していると述べた⁹。また『極楽台湾』を禁書に指定、この本を輸入した紀伊国屋書店の業務部主任関根大輔に事情聴取している。関根主任は、日本には出版物に対する検閲制度がなく、『極楽

⁷ 翌日1月12日には、台湾の3大新聞の1つ『中国時報』の第一面の記事となり、『聯合報』でも社説や社会面などで大々的に取り扱っている。

⁸ 刑法235条の内容は「散布、播送或販賣猥褻的文字、図画、声音、影像或其他物品，或公然陳列，或以他法供人觀覽、聽聞，處2年以下有期徒刑、拘役或科或併科3萬元以下罰金。意図散布、播送、販売而製造、持有前項文字、図画、声音、影像及其附著物或其他物品者，亦同。前二項文字、図画、声音或影像的附著物及物品，不問屬於犯人與否，一律沒收。(猥褻な文章、画像、音声、映像あるいはその他の物品を散布、放送或いは販売するか、または公然と陳列するか、他の方法をもって閲覧、聴聞に供した場合、2年以下の有期懲役、苦役または3萬元以下の罰金を科すか併せて科す。散布、放送、販売の意図で、前項の文章、画像、音声、映像およびその他付属物あるいはその他の物品を製造、所有した場合もまた同様とする。前二項の文章、画像、音声或いは映像の付属物および物品は犯人か否かを問わず、一律没収する)」というもの。

⁹ 『中国時報』2002年1月13日、3面。また『自由時報』2002年1月21日5面では、台北市議会で「淫虫」というスタンプを押すことが検討されたことが日本のマスコミで報道されたとして、この報道されたことを自体を恥とする記事が見られる。

台湾』は ISBN（国際標準図書番号）も付されたという意味で一般的な書籍であること、出版社自体も取り扱い店も合法的な業者であり違法と見られることは考えもしなかったこと、台北市の微風広場内にある紀伊国屋書店には台湾専門の棚があり、日本で発行された書籍で「台湾」の二文字があれば基本的にはこの棚に並べることにしていることなどを述べ、自ら猥褻図書とは知らなかった点を強調した¹⁰。当時の警察の発表では、猥褻物を頒布した罪として起訴されるだろうとしており、その後実際に送検されている。

馬英九の怒りは、その日たまたま台北市長室に表敬訪問に訪れた日本交流協会台北事務所の山下新太郎所長にも向けられた。山下所長は台北事務所所長の任をまもなく下り帰国の途に着くということで、この事件のことは何も知らずに 11 日に馬英九台北市長のもとを訪れたのだが、市長から『極楽台湾』は台湾社会や台北のイメージを傷付けたと不快感をぶつけられ、かつこの本の内容は去年 10 月台北市が風俗の徹底取締りを始める前の古い資料であり、現在の状況とは合致してないと抗議される。これに対し山下所長は、任期を終え日本に戻ったら日本政府にこのことを伝えるにとどまり、二人の会談はかなり気まずい雰囲気で行われたと台湾各紙は伝えている¹¹。

その後、台北市と高雄市では『極楽台湾』に掲載されている店などを取り締まるが、その多くはすでに閉店、移転、営業項目の変更などをしていたり、掲載されている写真が日本で撮影されたものであるなど、情動的にはまったくのたがひであることなどが警察の調べで明らかになっていく。

また 1 月 12-13 日、出版元の司書房からの談話も各紙で紹介されている¹²。司書房は、日本の読者に「情報」を提供するために書か

¹⁰ 『中国時報』2002 年 1 月 12 日、1 面、あるいは『聯合報』2002 年 1 月 13 日 3 面。

¹¹ 『中国時報』2002 年 1 月 12 日、5 面。

¹² 「出給日人看 怎麼掀起風波」『聯合報』2002 年 1 月 13 日、3 面、あるいは「出版社：未料到會造成風波」『台灣時報』2002 年 1 月 12 日、3 面など。

れたが、台湾に騒ぎを呼び起こすのは「思いがけないこと」であり、その内容が台湾の法律に触れるものだとは思いつかなかったとしている。司書房の対応からも紀伊国屋書店と同様、台湾の騒ぎの大きさに対する戸惑いが見られる。

こうした馬英九の怒りに応える（としか思えない）形で、1月18日には台湾に買春に来たと見られる日本人男性が一時拘束され、相手の中国出身の女性も社会秩序維持保護法違反容疑で逮捕されている。これを一つの区切りとして、騒動は収束へと向かう¹³。

なお、『極楽台湾』で紹介されていた高雄市でも、市議会がこの本が取り上げられ、市当局の風俗取締りに対して市議会議員がこれを激しく批判する。当時の高雄市長は民進党出身の謝長廷で、その風俗取り締まり対策は「浪漫取締」と揶揄されていたが、謝長廷は「それなら台湾でも負けずに『極楽日本』という本を出したらいいじゃないか」と切り返す。その後、謝長廷はこの本をこれ以上取り沙汰するのは逆に宣伝することになりかねないとして、基本的に取り合わない方針を貫くにとどまった。

3. 報道内容から

3.1 馬英九の反応とそれに対する批判

上述の顛末から明らかなように、この騒動の中核となっているのは、国民党に所属する台北市長馬英九の怒りである。現総統（2008年7月現在）である馬英九は当時からすでに国民党の中で最も人気のある政治家であり、彼がこうした性的な話題に対しさまざまな反応を示したことはマスコミとして格好の話題作りになったことは間違いない。

馬英九がこうした過剰な反応（こう形容することは高雄市長の謝長廷との比較でも明らかであるし、またその行動が風俗産業の取締りの成果が芳しくないことから別のことに焦点を移すための戦略だ

¹³ だが『自由時報』だけは、1月21日にも台北市議会が『極楽台湾』関連の議題を論じたことを取り上げ、これを批判する記事を掲載している。

ったのではないかという指摘をも喚起していることから決して不適當ではないだろう¹⁴⁾をした背景には、彼の市長就任以来からの評価が深く関わっており、『極楽台湾』騒動に関しては主に前年(2001年)からの台北市における風俗徹底取締りからの一連の流れの中で論じられている。この前年からの台北市の風俗徹底取締りは、2001年10月5日に馬英九が「1ヶ月で台北市から風俗産業を完全に締め出す」と宣言したのが発端となる。これは、馬英九が台北市長に当選してから風俗業者が増えたという批判に対抗した措置で、2001年11月4日までの1ヶ月間で535件、843人を検挙したと発表している。この取締りは2001年いっぱい続き、11月は338件、491人を検挙、12月は129件、194人を検挙し、台北市では風俗業者の撲滅を着実に進めているとアピールしていたのである¹⁵⁾。その矢先に、日本で出版された印刷物に台北市の風俗が大々的に紹介されたことが馬英九の逆鱗にふれた、というのが台湾のマスコミの報道の流れである。

実際、マスコミ報道過熱の発端となった王世堅議員の馬英九批判は、「台北市の風俗一掃はまったく功を奏していない」ことがポイントであったし、馬英九自身の山下新太郎に対する発言——「これは徹底取締り以前の台北の情報ではないのか？」や、『極楽台湾』騒動に対するその他の見方——「これは台北市の風俗取締り政策の1つのエピソードに過ぎない」¹⁶⁾という意見などからも、馬英九の怒りは、風俗取締り対策に向けられた批判に対するものであったように思われる。このためメディアでの論調も当然そのコンテクストに沿ってなされ、馬英九の過剰かつ矛盾をはらんだ反応に対する批判が数多く見られた。例えば、馬英九の反応は台北市や台北市長としてのメンツをつぶされたためとするもの¹⁷⁾や台湾の国際的なイメージ

¹⁴⁾ 莊嘉台(2002)「封殺『極楽』 小馬哥本末転倒」『新台湾新聞週刊』(第304期)、29ページ。

¹⁵⁾ 『中国時報』2002年1月12日、5面、あるいは『聯合報』2002年1月13日、3面など。

¹⁶⁾ 陳新民、同注3。

¹⁷⁾ 「小馬哥之怒」『聯合報』2002年1月13日、3面。

を大いに傷付けたためだ¹⁸とするものである。

もし馬英九が単に自らの政策に対してメンツをつぶされたと感じているのなら、この『極楽台湾』騒動のほんの少し前に起こった国会議員黄頭洲のスキャンダル¹⁹の方が台北市にとってはよほどショッキングな事件である。だが「もしこの本が台湾人の手によって出版されたものであるのなら、おそらく警察支局長の1人もまったく意に介さなかつたらう」²⁰という意見にも見られるように、この騒動の背景にあるのは「国際化」あるいは「国際的イメージ」なのである。

3.2 台湾の国際的イメージへの懸念

台北市の風俗一掃を目指した取締りを開始する少し前の2001年10月初め、馬英九は台北市郊外にある中国文化大学で行った「私の台北経験」と題した講演で、再三にわたり国際化を強調し、台北市を国際的な大都市にすることこそ自分の使命であると結んでいる²¹。騒動において馬英九の激怒の理由として彼自らが語っているのは、「台北市のイメージが損なわれた」点であり、日本交流協会台北事務所の山下新太郎に抗議したのも「台北がそういう都市でないことを日本に伝えてほしい」ということだった。

だが国際社会からの視線を意識していたのは馬英九だけではない。最初に台北市議会でこの本を取り上げた王世堅議員も、台北市が行っている風俗取締りが形だけであり「海外にまでその名が知れ渡っている」と批判しており、与野党ともに国際社会からのまなざしを強く意識することが前提として議論が行われているのである。報道においてもそれは顕著で、世界的な大都市を見回してもどの都市に

¹⁸ 「只有台湾警察不知道」『聯合報』2002年1月12日、15面、あるいは「極楽辱台 我国強烈抗議」『台灣時報』2002年1月12日、1面など。

¹⁹ 国会議員の黄頭洲が台北市内の某一流ホテルで乱交パーティーをしたというスキャンダル。2001年12月末に明るみになった。

²⁰ 陳新民、同注3。

²¹ 文化大学の講演では国際化のため、台北市の交通状況の改善、大型ショッピングモールの建設などを挙げている。

も風俗産業は存在しているものであり、オランダや北欧諸国で売春が合法化されている現状などが紹介され、風俗産業の存在そのものが国としての尊厳を傷付けるわけではないことを指摘する記事が複数存在する²²。これらの記事は、風俗産業が世界各国の大都市に存在しているという同時代的な普遍性を根拠に、『極楽台湾』という書物の存在を普遍化し、台北市議会での応酬を疑問視することで騒動そのものへの傍観者的な態度を装うものだと言ってよいだろう。

これらの記事の中で、台湾のジェンダー研究の旗手である何春蕤の発言——大都市には風俗産業があるのが当たり前であり、『極楽台湾』で台湾の各都市の風俗産業について書かれたからといって、「台湾が何を不安に思う必要があるのだろうか」——は、問題の所在を的確に指摘しているように思われる²³。何春蕤の発言は、行政側の性的な文化への過剰な反応によって自らの研究や運動などがやりにくくなることへの懸念があり、また「風俗産業の取締りをする必要はない」という彼女の意見に対し、一体どの程度の台北市民が賛成を示すかという点では確かに疑問が残る。しかし、彼女の「台湾が何を不安に思う必要があるのか」という反問は、この騒動の中に、台湾社会に横たわる国際社会からの視線への過剰な敏感さ、また台湾社会の日本の挙動に対する過敏さを鋭くついているのではないだろうか。

3.3 歴史とのリンク

またこの騒動の一連の報道の中では、歴史的なコンテクスト、特に日本統治時代と関連付けて論じられている点に注目したい。

『中国時報』、『台湾日報』、『自由時報』では1月13日、昭和10年（1935年）に出版された『行楽の台湾』という旅行ガイドを紹介している²⁴。これらの記事によると、『行楽の台湾』は台湾経済時報

²² 『中国時報』2002年1月12日、2面、あるいは『聯合報』2002年1月13日、3面など。

²³ 「仮装色情不存在，偽善」『聯合報』2002年1月13日、3面。

²⁴ 「67年前《行楽台湾》已樂翻全台」『中国時報』2002年1月13日、3面、「尋

社が出版した観光ガイドで、本の構成などから見ると 1935 年の「台湾博覧会」を見に来る日本人（内地人）向けに作られたものだと思われる²⁵。各紙では、日本統治時代の『行楽の台湾』を取り上げることで、『極楽台湾』のようなことは今に始まったわけではなく、日本人だけがこうしたガイド本を作るわけでもないとしており、『中国時報』では『行楽の台湾』と『極楽台湾』を「日本と台湾の文化の差異を垣間見ることができる」対象としてとらえるべきだと締めくくっている²⁶。また日本統治時代からの伝統として日本人が台湾社会を徹底的に調査するのは台湾を理解しよりよく統治するためであり、決して台湾を軽視しているわけではない、という論説もやはり同日の『中国時報』に掲載されている²⁷。それは、日本統治時代の日本人が編んだ『行楽の台湾』を取り上げることにより、『極楽台湾』作成の意図を日本人の国民性に帰結させることで、決して台湾が国際的に低く見られているわけではないという一種の慰めとなっていると考えてよいだろう。とはいっても、『中国時報』がこの騒動の関連記事を 1 面からかなりの紙幅を割いて掲載してきたこと自体、果たしてそれが本当の意味での慰めや騒動に対する批判であるのか、あるいは批判を装った中国大的抗日感情に迎合したものであるかは、読者によってさまざまな読み方がなされることだろう²⁸。

もちろん、この騒動を日本統治時代、そしてそれ以降の歴史的コンテクストの中でとらえた文章の中には、上述のような同時代的、

芳小冊子 民国 24 年就有」『台湾日報』同日 5 面、「66 年前 日人就出過行楽台湾」『自由時報』同日 5 面。

²⁵ 同上。『中国時報』の記事によると、『行楽の台湾』は「台湾博覧会の全貌」、「海の旅」、「陸の旅」、「博覧会歌集」、「花街案内書」、「全島芸者・女給名簿」の 6 つの単元から成っているという。

²⁶ 陳界良「認知落差 凸顯日台性不相近」『中国時報』2002 年 1 月 13 日、3 面。

²⁷ 『中国時報』2002 年 1 月 14 日、8 面。発言者は元台湾省文献会主任委員の簡榮聡で、「日本統治時代、日本人は高圧的な態度で台湾を統治し、台湾の一般庶民はほとんど完全に人間としての尊厳はなかった」が、「日本人が長期的に台湾を統治するために台湾社会を徹底的に調査し、記録・分類したことは日本人の長所がなせるわざである」と述べている。

²⁸ 江冠明は『中国時報』の報道について「台湾の統一派メディアの『精神的錯乱』、『錯乱した精神アイデンティティ』、あるいは『日本人アレルギー』に感染しているのか」と述べ、過剰な報道だとしている。同注 5。

歴史的なコンテクストから安堵を得ようとするのにとどまらないものも見出せる。例えば、『聯合報』の投稿欄に掲載された文章では、日本統治時代の慰安婦問題から黄春明の「さよなら・再見」に描かれた買春にやってくる日本人男性、『極楽台湾』の1年ほど前に起きた『台湾論』騒動などと絡めて、日台関係における「台湾人の悲哀」が論じられている²⁹。

台湾人の日本に対する複雑な感情は馬英九の過剰な反応を読み解く際にも一つの視点を与えてくれる。「私たちが気にしているのは『違法な内容』なのか？それとも『生産地』が招いた民族的な確執なのか？」³⁰という批判は、外省籍である馬英九の日本に対する私的な感情としてその反応を捉えたものである。馬英九の一連の行動が行き過ぎだと感じられるのは「馬英九の『日本』という肩書きに対する怒りが、『特殊印刷物』や『買春客』への怒りを大きく上回っているから」³¹だという指摘もある。台湾と日本の関係を論じる際に限って言えば、確かに「本省／外省」という二項対立は今でも意味を失っていないように見える。特にこの『極楽台湾』騒動に関しては台北市長である馬英九の過剰な反応、そしてその報道の仕方を論じるに当たって、多くの台湾の論者が「本省／外省」というパラダイムを用いている。そしてこの中でそのパラダイムを際立たせる記号として「日本」が作用しているのである。

4. 装置としての「国際」と「日本」

馬英九自身の言動やマスコミ報道のあり方の是非はともかくとして、この騒動全体を眺めてみると、馬英九や台北市議会、高雄市議会、マスコミの報道合戦など台湾側の熱さに比べ、その報道からは日本側の「なぜこんな本がそれほど問題になるのか」という驚きや狼狽が際立つ。この温度差を示すように、『極楽台湾』については日

²⁹ 「這才是台湾人的悲哀」『聯合報』2002年1月12日、15版。

³⁰ 陳新民、同注3。

³¹ 陳静雲（2002）「《極楽台湾》勾起馬英九的仇日情緒」『新新聞週刊』（第776期）、新新聞週刊、28-29ページ。

本のマスコミでの記事は、酷似した騒動として取り上げられた『台湾論』騒動時に比べて決して多くはない。これはこの騒動における台湾側の問題意識が日本側とはまったく別のところにあり、日本とは共有できない台湾独自のパラダイムの所在を示すものなのである。

台湾側の反応全体に通底しているのは、日本を含めた国際社会に対する過敏性だが、ここで問題となるのは台湾にとっての「国際社会」の意味合いである。廖炳恵は台湾にとっての「国際化」が「本土化」と対になった概念であり、「本土化」の意識は台湾人が世界的な機関やイベント（例えば国連や WTO、オリンピックなど）において排斥される中で中国や国際社会に対して抱いた反感から生まれ、1971 年の国連脱退を一つのきっかけとして肥大したと指摘している³²。この「本土化」の意識はそれが「肥大」する前にも、台湾社会の「国際」への過敏性を如実に表した現象として出現している。その例の一つに 1960 年代に台湾全土を熱狂させた紅葉少年野球チームの活躍が挙げられる。1963 年に結成された台東県延平郷紅葉小学校の少年野球チームが 1968 年、当時日本と世界の覇者であった日本の和歌山少年野球チームに勝利したことで、台湾は大いに盛り上がるのである。なお、この少年野球チームの選手たちが原住民であったことはまた別の意味で興味深い。また「肥大」の後に起こった 1980-1990 年代の台湾ニューシネマの一連の流れは、別の形で台湾における国際社会の重要性を物語っている。国民党支配の下、禁忌とされていた二二八事件をテーマとして制作された侯孝賢の『悲情城市』（1989）は、まず海外に出品されてベネチア映画祭でグランプリを得たことで検閲をクリアした。台湾ニューシネマの流れはそれ以前から始まっていたが³³、凱旋を果たしたこの『悲情城市』を皮切りに、台湾ニューシネマはまず海外の映画祭に出品し、何らかの賞や肩書きを背負って台湾に凱旋するという形が一つのパターンと

³² 廖炳恵（2003）「台湾文化的重建」『新世紀智論壇』（第 22 期）、39 ページ、財団法人陳隆志新世紀文教基金会。

³³ 台湾ニューシネマの最初の作品は、侯孝賢・曾壯祥・万仁合同監督『兒子的大玩偶』（1983）が皮切りだとされている。

して認められるようになる。紅葉少年野球チームの熱狂は1960年代の台湾が置かれた国際的な孤立、『悲情城市』は戒厳令解除後まもない台湾での本土意識の台頭という異なった時代背景があり、それぞれの出来事が持つ意味合いもまた異なるが、そのいずれの出来事においても台湾にとっての国際社会の意味の大きさを示しているという一点においては変わりはない。侯孝賢の『悲情城市』が国際映画祭でのグランプリ受賞のオーラを背負って台湾に凱旋した時、台湾のマスコミはこぞって紅葉少年野球チームの活躍を引き合いに出したことも指摘されており³⁴、台湾社会では二つの出来事について国際的な承認を得たという同じ価値を見出していることを明確にしている。

廖炳惠は同文で台湾の有識者やメディアの「国際化」への過度に楽観的な態度に対し、「国際化」と「本土化」が実際には相互に依存する関係にあると述べているが、『極楽台湾』騒動から見れば「国際化」の場となる「国際社会」が、台湾にとっては他者としての意味合いを持った装置として捉えられていることがわかる。つまり台湾の価値や存在意義を承認する場としての国際社会は、『極楽台湾』騒動においては一つの装置として機能しているのである。その機能とは、発端となった民進党議員の批判、それに対する台北市長の怒り、そしてそれを報道するマスコミのいずれにも想定されている「国際社会」からのまなざしである。本来、台湾としてのアイデンティティが認められるための場であった「国際社会」は、それが意識されると同時に台湾社会に内面化され、そして外からのまなざしを内へのまなざしとして捉え返す働きを持つようになったのである。これはこの『極楽台湾』騒動において実に明らかとなる。つまり、日本側は特に台湾に対して意図的に何らかの働きかけを行ったわけではないのだが、台湾社会によって故意に発見されてしまった日本からのまなざしは、台湾社会において「国際社会」という内へのまなざ

³⁴ 齋隆壬（2000）「九〇年代台湾電影文化研究論述」、『文化研究在台湾』、319ページ、巨流図書公司。

しとして再構成されてしまったのである。他者装置としての国際社会が台湾社会の中に生じた年代についてはなんとも言えないが³⁵、メディアの発展や形態の変化に伴い、拡大化の様相を見せているのは間違いなさそうだ。

他者装置としての国際社会は、外からのまなざしを内へのまなざしとして捉え返す働きをするものである。当時台北市が国際化を掲げる中で、国際社会からの侮辱的な扱いという外からのまなざし(日本側にその意識はなかったにも関わらず)は内へのまなざしとして捉え返され増幅されていった。『極楽台湾』が日本側が予想し得なかった大きな騒動に発展した理由の一つがここにあるのである。

5. 二重の意味合いを持つ『日本』

『極楽台湾』騒動が示すのは、国際社会からの台湾に関する言説が、台湾社会の内包する他者装置によって増幅してしまうという仕組みである。これは2006年3月に台湾のマスコミで大々的に扱われた中村夫妻の問題³⁶においても同様であった。だが、国際社会が他者装置として作動する対象は、日本だけではない。それは、アメリカやヨーロッパで発生したコメントやイベントにおいても同様である。

だが、国際社会から台湾への視線だけであったなら、『極楽台湾』がここまでの大きな騒動になったであろうか。騒動の中でも指摘されているように、騒動の元が日本であることが騒動をより大きくし

³⁵ 日本統治時代であった1930年代初頭には、台湾で発展した歌仔戯が大陸に逆輸入され大人気を博したことなどが台湾知識人の台湾の本土文化に対する態度を変えさせる役割などを果たしている。拙著『1930年代台湾郷土文学的歴史析論』(博士論文)第三章を参照されたい。

³⁶ 日本で退職した後、老後を過ごすため台湾の埔里にロングステイをすることにした中村夫妻が台湾の環境が劣悪であるとして、当初の予定を早め日本に帰国した事件。2006年3月1日に埔里のマンションに入居したが、「埔里の道は犬のフンだらけ」、「病気の療養に来たのに健康になるどころか病気が悪化してしまう」などと台湾のマスコミで発言し、社会的に大きな問題として取り扱われた。その後、4月14日に中村夫妻が帰国、台湾行政院衛生保護署では全国的に台湾の衛生状況を見直すなどの対応に追われた。この時もマスコミの報道はかなりの過熱ぶりを見せた。

ているのではないだろうか。つまり、台湾において日本には国際社会の一員であるという同時代的な役割と共に、過去において統治国であったという歴史的なコンテクストからの意味合いも持たされているのではないかと思われるのである。

『極楽台湾』の関する一連の報道の中で、日本に対しどのように振舞うかは「本省／外省」という民族アイデンティティの問題に還元され、民族主義的論調の中で論じられていた。これは、日本が台湾社会において「本省／外省」という二項対立を喚起する表徴として捉えられているを意味している。もちろん多民族、多様な文化からなる台湾社会においては、「本省／外省」という枠組みは多数存在する対称的要素のうちの一つに過ぎない。日本が台湾の民族的な感情を刺激する表徴と見なされるのは、歴史的な要素と関係があることは誰も否定しないだろう。しかし、それは日本が台湾を統治していたという歴史的な事実というよりは、戦後の国民党の支配におけるコンテクストにおいて生成されてきた記号としての日本なのである。

光復後の台湾において、本土化や最終的には独立を目指す動きは、中国からの外圧と国民党からの内圧の中で常に抑圧されてきた。本土化に関する議論が盛んになるのは1970年代以降であり、文学の世界でもこの時期に大量の郷土文学が登場し、1980年代に台湾ニューシネマブームを形成する土台となる。またこの時期には台湾のメディアに違法なメディアが発展を見せ始め、特に1980年代末からの「地下広播電台」と呼ばれる違法のラジオ局、違法なケーブルテレビなどが台湾の文化状況に影響する力を持つようになってくる。この「地下広播電台」はいわゆる民進党系であり、これらの一連の流れは、文化的に見れば台湾における本土派の助長であると言える。時代的には1987年の戒厳令の解除、1989年の李登輝の総統就任など台湾意識の台頭が極めて明らかになった時期であった。この中で日本は、外省勢力に抵抗する象徴として用いられていた。例えば、違法なラジオ局の総称である「地下広播電台」は1980年代から出現

していたが、こうしたラジオ局の政治的な立場は民進党系が中心であり、1990年代中盤には台湾全体を網羅していた³⁷。これらのラジオ局からは往々にして日本の軍歌が放送され、民進党支持者が多かった当時のタクシーの車内では日本の軍歌を耳にすることが多かった。詩人で医者である陳克華は「数十年前に無数の台湾青年が日本の軍歌を歌いながら戦争で命を落としていったのに、今日の台湾にもいまだにこのような歌を流すラジオ局がある。これには一体、どんな現実的な意味合いが隠されているのだろうか」³⁸とそうした現象に不快感を顕わにしているが、これは当時野党であった民進党系、あるいは本省人の当時の政権に対する抵抗、そしてそれに対抗の表徴としての日本の軍歌であった。抵抗の表徴としての日本は台湾の本土的なモチーフを中心としたニューシネマの中にも見出せる。例えば侯孝賢の『悲情城市』には死刑に処される政治犯が「幌馬車の歌」を歌う場面があり、歴史的な事実との差異などが問題視されるなど論議をかもしているが、こうした日本へのノスタルジーは制作された1980年代末の台湾社会の気分を色濃く反映したものなのであり、日本での受容を見越した上でのノスタルジーではないことを付け加えておきたい。こうした事柄からわかるように日本は台湾において、「国際社会」という他者装置の一部でありながら、また同時に台湾社会の民族的な二項対立を喚起させる記号として存在しているのである。『極楽台湾』の扱い方をめぐる問題が、台湾社会の民族的な分裂を煽った原因はここにある。

日本において、台湾に関する言説の多くは親日的な面が全面に押し出されている。しかし『極楽台湾』騒動は、台湾社会における記号としての日本の二重の意味合いをより明確に示している。この事件が見せてくれるのは、本質的な日本ではなく台湾社会内部で再構築され記号化された日本なのである。そしてまた『極楽台湾』騒動

³⁷ 陳揚名、陳飛宝、吳永長（2002）『台湾新聞事業史』、164-174 ページ、中国財経出版社。

³⁸ 陳克華（1994年）「計程車裡的日本軍歌」『中国時報』（1994年10月8日）、第11面。

は、「親日的な台湾」というイメージが実際には多面的な台湾の一つの面だけを切り取ったものに過ぎないということを知らしめるものなのである。

(この原稿は、2006年3月に行われた台湾輔仁大学日本語学科主催国際シンポジウム「多様化社会の課題」での発表に加筆、修正したものである。)

参考文献

- 陳光興 (2000) 『文化研究在台湾』、巨流図書公司。
- 陳揚名、陳飛宝、吳永長 (2002) 『台湾新聞事業史』、中国財經出版社。
- 廖炳惠 (2003) 「台湾文化的重建」、『新世紀智論壇』(第22期)、36-43ページ、財団法人陳隆志新世紀文教基金会。
- 陳克華 (1994) 「計程車裡的日本軍歌」、『中国時報』、(1994年10月8日)、第11面。
- 林文淇 (1994) 「日本軍歌 台湾悲歌」、『中国時報』、(1994年10月11日)、第11面。

資料

- 『極楽台湾夜遊び特選街』2001年12月、司書房出版
- 『中国時報』、2002年1月12日-31日、中国時報社。
- 『聯合報』、2002年1月12日-31日、聯合報社。
- 『台湾日報』、2002年1月12日-31日、台湾日報社。
- 『自由時報』、2002年1月12日-31日、自由時報社。
- 『中央日報』、2002年1月12日-31日、中央日報社。
- 『台湾時報』、2002年1月12日-31日、台湾日報社。
- 宋丁儀、2002、「從『極楽台湾』風波看台湾媒体環境」、『新聞評議』(第325号)、新聞評議雜誌社。
- 莊嘉台、2002、「封殺『極楽』小馬哥本末顛倒」『新台湾新聞週刊』

(第 304 期)、29-30 ページ。

江冠明 (2002) 「極楽台湾 極度瘋狂 仮道学的批判 傲慢的中国意識」『新台湾新聞週刊』(第 304 期)、31-33 ページ。

陳静雲 (2002) 「『極楽台湾』勾起馬英九的仇日情緒」『新新聞週刊』(第 776 期)、新新聞週刊、28-29 ページ。

陳新民 「極楽台湾風波的啓示」サイト『国政評論』

<http://www.npf.org.tw/PUBLICATION/CL/091/CL-C-091-039.html>